



いはゆる古典學派のトランスファー理論について(その二)

松井, 榮一

(Citation)

国民経済雑誌, 70(5):65-88

(Issue Date)

1941-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00056440>



いはゆる古典學派のトランスファー

理論について (その二)

松 井 榮 一

- 一 序説——對立する二つの理論
- 二 いはゆる古典學派の理論
- 三 ソーントン
- 四 ジェー・エス・ミル (以上前號)
- 五 貨幣數量説の吟味 (以下本號)
- 六 新古典學派 (タウシツク) における發展
- 七 部分價格水準の分析
- 八 結語——「價格變動説」の特徴

五

ソーントンミルの機構論はその後多くの學者によつて承認され、いはゆる古典學派の理論 the "classical" theory と稱せらるゝにいたつた。いま、この説の framework を繰返すならば、それは、金移動→貨幣數量の相對的變動
↓
物價水準の相對的變動→貿易變動なる、自働的均衡回復過程にシエーマ化することができる。この説は、その

後、多くの點において補完せられたが、總じてそれは、

(一) 金移動→貨幣量變動→物價變動の連環において、貨幣數量説に對する檢討と、

(二) 物價變動→貿易變動の連環において、部分價格水準に關する理論の深化

とに大別することができ(増井「國際資本移動理論の一考察」國民經濟雜誌六一の五、昭和十一年十一月、二一頁參照)。

まづ、第一の點について述べるならば、ソートン・ミルの説は、金移動→貨幣量變動→物價變動の直接的な結びつきを措定するものであるが、しかし、この關係は間接的のものであつて、その間に支拂準備と割引歩合とが——一言にしていへば、信用政策が——介在することが認識せらるゝにいたつたのである¹⁾。

(1) 古典學派の貿易理論は貨幣および銀行現象が今日よりも單純であつた時代に形成されたのであるが、しかも古典學派の人々は既にその當時存したそれらの錯雜さへも抽象した。特に彼等の敘述は、預金銀行の操作より生ずる複雑さを考慮に入れることを怠り、直接金移動を物價の變動に結びつけ、少くともその後の時代に金保有高の變動と物價水準の變動の間に銀行の操作が介在する様式を少しも分析しなかつた。しかしながら、金移動は銀行預金および銀行券流通の變動に影響することを通じて、物價水準に影響するのである。従つてその限りに於いて、金移動は物價水準の變動の直接原因たるよりは、むしろそれに追隨する如く取扱はれる。即ち金移動に對する銀行政策の可能性が考へ得られる。(ヴァイナー「外國貿易の理論」一一—二頁)

こゝで、その一二の代表的なものについて述べよう。

貨幣と物價を結ぶ影響の「間接的」連鎖を初めて述べたのはマーシャルであると通常いはれてゐるが、しかしその

分析はそれ以前に行はれてゐたのであつて、この點に關するマーシャルの貢獻は、むしろ、その機構を精密化した點にある、といはねばならぬ。

(2) 論者の名は種々擧げることが出来るが(例へば、イヴェルセン、前掲書、二一八—一九頁を見よ)、ヘンチェル(前掲書、一二三頁)は、就中、シチュウマン(H. Sisdewick, The principles of political economy, London 1883. Bk. 2, ch. 5. The value of money) 及びギンマン(R. Giffen, Essays in finance, Second series, London 1886. Essay 2, Gold supply, the rate of discount, and prices) によつてマーシャルの説は豫想されたことを指摘してゐる(これらの所論については同書、一一七—一二頁参照)。

貨幣と物價の間接的關聯についての「古典的」形態と稱せらるゝ(イヴェルセン、前掲書、二一九頁)マーシャルの理論³⁾は、次の如くである。

(3) 貨幣理論に對するマーシャルの主たる貢獻の一つは數々ある(J. M. Keynes, Alfred Marshall, 1842-1924. Memorials of Alfred Marshall, ed. by A. C. Pigou, London 1925. p. 28, 30. 宮島綱男監譯『マーシャル經濟學論集』昭和三年、五二頁、五七頁)この理論は、彼の Evidence before the Gold and Silver Commission, 1887-1888 (特に初めの部分) 及び Evidence before the Indian Currency Committee, 1899 によつて見られる。これらの文書は現在 'Official papers by Alfred Marshall, ed. by J. M. Keynes. London 1926' に復刻されてゐる。なほ彼の結論の要點は、幾らか異つた形で、彼の Money credit and commerce. London 1923. Bk. I, chs. 4-6 (松本金次郎譯『貨幣信用及商業』昭和二年) において述べられてゐる。

マーシャルは、他の事情にして等しければ、物價は通貨として用ひらるゝ金屬の數量の増減に比例して騰貴する、といふ通説を承認するが、しかし、「他の事情にして等しければ」といふ限定句に重きを置き、この「他の事情」の變化は貴金屬の數量の變動よりもヨリ一層重要であることを指摘する(例へば、一八八七年の Evidence, Q. 9629; Official papers, p. 345 及び Preliminary Memorandum;

ibid., p. 21)。換言すれば、通貨の數量の變動は、物價を結合的に決定する種々の要因⁴⁾の一つに過ぎないのである。

(4) マーシャルは、通貨の數量が等しき場合、物價の高さは次の諸原因によつて變動するとしてゐる。(一)販賣せらるゝ物品の數量、(二)取引の回数、(三)通貨の流通速度、および(四)通貨を使用する取引とこれを使用せざる取引(即ち、信用取引)の割合、の變動。(ibid., Q. 9629, ibid., p. 35) この最後の要因は、取引方法 *methods of business* なるヨリ大なる要因の中に含ましめられる (ibid., Q. 9638; ibid., p. 37)。これによつて見れば、マーシャルの貨幣數量説が後の例へばフィッシャーのそれを既に斐靡せしむるものがあることが知られる。ケインズは適切にもいふ「マーシャルが夙に完成した思想と類似のものを著書の形で出版した數個の事例の中で、アーヴィング・フィッシャー教授は最初のものであつた」と(ケインズ、前掲論文、二七頁註二、宮島譯、五二頁註二)。なほ、マーシャルの貨幣數量説については、彼の『貨幣信用および商業』第一篇第四章を見よ。更に、有井治『貨幣數量説の發展』昭和十四年、九三—八頁參照。

さて、何等かの原因で(その原因は述べられてゐない)一國の金屬通貨の數量が——地金商人を通して通常の方法で *in the ordinary way through the bullion dealers* ——増加するにいたつたとせば、それはまづ第一に中央銀行の支拂準備を増加せしめ、割引歩合を引下げしめ、「投機」*speculation* を増大する。こゝにいふ投機には、嚴密な意味の投機のほかに、短期貨幣市場——*“Lombard Street”*——において行はれるあらゆる種類の金融活動も含まれてゐる。この投機の増加は商品に對する需要を増大せしめることによつて、物價を騰貴せしめる。その結果、ヨリ多くの貨幣が現金取引のために必要となり、通貨の流通量は増加して、物價の騰貴を支持するにいたる。(ibid., Q. 9633 以下、特に Q. 9640 以下、特に pp. 38-9, 40) 第二に、もし人々が取引の必要上欲する以上に金が流通するならば、人々はこれを單純に諸

銀行に送付するであらう。諸銀行からそれは中央銀行の支拂準備に入り、こゝから再び一般市場へ戻つて、信用を膨張せしめ、投機を増加せしめ、結局、物價を騰貴せしめる。物價が騰貴すれば、通貨の流通量は増加せざるを得ない。⁵ (Ibid., Q. 9649-9650; Ibid., pp. 40-41.)

(5) マーシャルは具體的にイギリスについて述べてゐる。従つて、彼の所論の理解には、一八八〇年代におけるイギリスの經濟金融事情を背景にすることが必要である。

かくの如く、貨幣と物價の結びつきは支拂準備と割引歩合を通じて間接的のものである故に、マーシャルは金移動が物價に及ぼす影響はヨリ一層間接的であり、かつヨリ一層不確かであることを知つてゐたのであるが、しかし、問題を國際間に移して論ずる場合、彼はこれを全く忘却して、傳統的な正貨移動機構をミルと同様に述べてゐるのである。(エンヂェル、前掲書、一二三—一五二頁、一五二頁、イヴエルセン、前掲書、二二〇—二二頁参照)

(6) 例へば、彼の『貨幣信用および商業』第三篇第五章「國際爲替」(一四〇—一五四頁)を見よ。彼はそこで「一國の貨幣市場において課せらるゝ割引歩合の變動がその國の商業的債務の均衡維持の上に演ずる役割」(第三節の標題)について、極めて一般的敘述を行ひ(一四七—一九頁)、最後に、割引歩合の國際較差の大なる場合には短期資金の移動が起り——マーシャルによれば、これは金移動の形にて行はれる——、金流入國にては信用膨張が可能となり、「物價は騰貴しないまでも下落することはないであらう」(一四九頁、邦譯二八八頁)と述ぶるのみである。

しかしながら、マーシャルに先き立つて、割引歩合の變動が爲替相場において占むる役割に注目して、「爲替相場

變動の金移動の機構」the exchange rate—premium—gold flow mechanism(エンヂェル、前掲書、一四〇頁、その他諸所)に修正を加えたものに、ゴッシェンがある。

この有名な『外國爲替理論』(G. J. Goschen, The theory of foreign exchanges. London 1861. 以下引用)の著者はそれ以前の人々と同じく、資本の國際的トランスファーはまづ第一に爲替相場を變動せしめ、金の移動に導くことより論を進める。即ち、外國より借入を行つた國の貿易尻が支拂超過にして、しかもこれに對する送金手段を缺如せる場合には、借入金額に對して貸付國宛に振出された手形の追加的供給は事態を匡救するであらう。これに反して、決済を必要とする差額の存しないときは、借入は一般に正貨で受取られるであらう。(同書、二七頁)即ち、借入が或る金額に達すると、爲替相場は正貨輸送點を割り、金が借入國に流入し始める、といふのである。しかしながら、彼は、金移動は國際收支の突然の・しかも大なる逆轉の場合にのみ必要である、と考ふるものゝ如くである。何故なれば、他の箇所(同書、九五頁)において、彼は、債務國への金の流入は「不自然で人爲的」である、それは債務者から支拂を受ける代りにそれ以上貸付ることになるから、と註記してゐるからである。

かくの如く、金移動の重要性を最小化する代りに、ゴッシェンは割引歩合の國際較差に基く短期信用取引を重視する。彼は外國爲替の調整“correctives”——特に外國爲替が逆調“unfavourable”(＝金流出の兆候)である場合の——を論ずるに當つて、國際貸借に基因する爲替の逆調の場合、均衡は(イ)輸出増進、輸入減退、および(ロ)金利引上げ、の二つの方法によつて回復されるとなす。即ち、その擾亂が(一)長期にわたる場合には、均衡の回復は貿易

の方向の變化 a change in the course of trade によるのほかはないが、しかし(二)一時的なる場合には、それは金利を引上げて外國より資本を吸引することによつて可能である。例へば、貿易の季節的變動(上半季は入超、下半季は出超)の場合、金利を引上げて支拂超過の間外國より借入をなし得るならば、しからざれば生じたるべき國際貸借の不一致、従つて起るところの爲替の變動を調節することを得、これによつて「地金の二重輸送」double transmission of bullion(同書、一四九頁)を避けることができるであらう。(同書、一二八―九頁、なほ三八―四〇頁參照)即ち、金の輸出が巨額に上ると豫想され、資本もしくは通貨の引揚がその國の經濟界に惡影響を與ふると考へらるゝ場合には、金利を引上げて外國から資本を吸引することが望ましいのであつて(同書、一三〇―三一頁)、金流出に對する最も有力にして有效なる手段は割引歩合の急速なる引上げ以外にはないのである(同書、一四七頁)。

(7) たとへ支拂超過が繼續の場合でも、金利の引上げは物價に及ぼす影響を通じて輸入減退に導き得ることを、ゴッシェンは指摘してゐるが、しかし彼は主として、ヨリ一層普通の一時的變動の場合における高き利子歩合の作用について述べてゐる(同書、一二九頁)。

かくの如き短期資本の國際的移動)について、ゴッシェンは次の如く記してゐる。

「(上略)如何なる時にも銀行家および爲替業者の手中には大なる額の諸國宛手形が存する。これらは一部分は手形價格の騰落に投機せんがためであるが、しかし、大部分は、専らそれより得らるべき利子のために保有せらるゝものである。(中略)それらの手形に具現せられ、それなくしてはこれらの手形が存在し得ないところの債務は、早

晩支拂はれねばならない。しかしそれが流動化される時期は、若干の限界内において、利子歩合の如何によることに留意すべきである。(同書、一三) (八一—九頁)

(8) それはイヴエルセンのいはゆる均等化移動、キンドゥルバーガーの収益型の短資移動に該當する(前段四、前號、六二頁註(1) 參照)。そのほか、ゴッシェンは「投機的移動」についても若干闡説してゐる(同書、一二—二頁、一三七頁、一三八頁等)が、しかし彼が爲替投機には餘り重きを置いてゐないことは、注目に値する。

さて、右の如く、ゴッシェンは金の流出(およびその豫想)に對する最も有力なる矯正手段として割引歩合の變動を強調するのであるが、これによつて、國際收支の均衡保持もしくは回復は主として貨幣市場即ち、割引歩合と爲替相場に依存せしめられ、商品市場即ち、商品物價に影響するのは極端なる場合にのみ必要とされるに過ぎなくなつたことに、注目すべきである(エンヂェル、前掲書、一四〇—四一頁、イヴエルセン、前掲書、二二〇頁參照)。しかしながら、ゴッシェンは調整機構における國際短期資本移動の役割を強調し、その反面、金移動の重要性をそれだけ限定せんとしたとはいへ、未だ國際調整手段としての短期資本を金と同列に置く(キンドゥルバー、前掲書)程度までは達してゐないのである¹⁰⁾。

(9) ゴッシェンが利子歩合の變動を重要視せざるを得ざるにいたつたのは、根本的には、彼が爲替相場を以て「外國爲替手形の價格」と解したことに基因する、と考へられる。かくの如き外國爲替手形の價格は第一次的には手形の需給即ち國際貸借によつて決定せられるのであるが(ゴッシェン、前掲書、四三—五頁)、それは主として一覽拂手形についてである。そこで進んで期限附手形をも考慮せねばなくなるが、長期手形の場合には、更に、(イ)手形仕向國における利子歩合、および(ロ)兩國の信用狀態が爲替相場に影響する(同書、五二—六頁)。かくの如くにして、利子歩合が爲替相場の決定において國際貸借と並んで重要

なる要因となるのである。(ゴッシェンの爲替理論の概要については、例へば、金原賢之助『爲替理論概説』昭和十五年、一二—四〇頁を見よ。)

(10) エンヂェルも國際收支の均衡攪亂を二種に分ち、それが小規模にして一時的の場合には爲替相場の變動のみにて調整されるが、長期・大規模の場合には、續いて金の移動が起り、割引歩合は金流出國にて引上げられ、金は還流するにいたることを指摘して、古典的機構に修正を加へてゐる(前掲書、第十六章、三九九—四一八頁)。いま、この複雑化された機構をホワイトの要約(前掲書、五—一〇頁)に従つて方式化すれば、次の如くである。

(一) 對外支拂の増加→送金のための外國爲替手形の需要増加→爲替相場騰貴→金輸出點に到達

爲替の供給は、次の事情が発生すれば、爲替相場の騰貴により誘發されて増加する。(イ)爲替相場の變動による、商品輸出超過増大、(ロ)外國人の國內消費増大、(ハ)外國人の國內への長期投資増大、(ニ)爲替業者もしくは銀行の爲替投機賣。

たゞし(イ)の効果については賛否兩論あり、(ロ)(ハ)は negligible、(ニ)は小規模の不均衡を修正するに役立つ。

(二) 金流出

(三) 金準備は金流出國にて減少、金流入國にて増加→金流入國にて貸付(預金)の相對的擴張、金流出國にて割引歩合の相對的昂騰

(四) 金流出國の割引歩合騰貴→短期資金を外國より吸引→金の喪失をチェックし、場合によつては金流出を全然無くする

(五) 基本的不均衡が大にして、金流出によつてつくり出された手形の供給増加により訂正されない場合には、金移動→信用量に影響(金流入國⇨金準備増加→要求拂預金増加、金流出國⇨金準備減少→要求拂預金減少)

(六) 信用量の變動→物價および所得變動→貿易變動→國際收支の均衡回復

いはゆる古典學派のトランスファ理論について

六

第二の、一般物價水準より部分價格水準への理論の深化を跡づけるに先立つて、行論の便宜上、新古典學派におけるトランスファ理論の發展を顧みることとする。いま、その代表的なものとしてタウシックを取り上げよう¹⁾。

(1) 「この『國際貿易理論の』分野におけるタウシックの仕事のすべては、イギリス古典學派の分析の體系的再述と精製として特徴づけ、過言ではなから」(J. Viner, Professor Tausig's contribution to the theory of international trade. Explorations in economics, New York 1936, p. 5). タウシックの貿易理論への貢獻はヴァイナーのこの論文において盡されてゐる。

タウシックは國際收支の均衡を攪亂する二種の要因を分つてゐる。その一は「外來的」"extraneous" 要因であつて、例へば國際貸付の如く國際貿易の通常の商品取引以外に發するものであり、他は「內在的」"inherent" 要因にして、豐作または凶作の如く商品移動それ自體のうちに發するものである。しかして後者は前者を強めることもあれば、相殺することもある。(タウシック、前掲論文、三八七頁)

外來的要因によつて攪亂された國際收支の均衡回復の機構を、タウシックは次の如く述べてゐる。
いま、合衆國およびドイツにおいて小麥およびリンネルの生産條件は次の如くであると假定する。

	一日の賃銀	賃銀總額	生産高	國內供給價格
合衆國、一〇日の勞働	一・七〇ドル	一七ドル	小麥 二〇	〇・八五ドル
同	一・七〇ドル	一七ドル	リンネル二〇	〇・八五ドル
ドイツ、一〇日の勞働	一・〇二ドル	一〇・二〇ドル	小麥 一〇	一・〇二ドル

同 一・〇二ドル 一〇・二〇ドル リンネル一五 〇・六八ドル
比較生産費説に従ひ、合衆國は小麥を輸出し、ドイツはリンネルを輸出する。それ／＼の輸出高を次の如くであるとする。

合衆國、小麥輸出	單價 〇・八五ドル	總量 一〇、〇〇〇、〇〇〇 〱八、五〇〇、〇〇〇ドル
ドイツ、リンネル輸出	單價 〇・六八ドル	總量 一二、五〇〇、〇〇〇 〱八、五〇〇、〇〇〇ドル

即ち貿易收支は均衡し、爲替相場は平價を保ち、正貨の移動は行はれない。

かゝる状態において合衆國が貢納として年々百萬ドルをドイツに送金するとせば、いまやアメリカ人がドイツ人に支拂ふべき貨幣總額は九百五十萬ドルとなり、從來の小麥の輸出を以てしてはこれだけのドイツ宛爲替の需要を充し得なくなる。その結果、爲替はバーを割つて、ドイツ宛爲替は騰貴して合衆國において打歩がつき、正貨がドイツへ流出する。物價と貨幣貨銀は合衆國で下落し、ドイツで騰貴する。これらの變動は、例へば次の如き新なる均衡状態に達するまで繼續するであらう。

合衆國、一〇日の労働	一・六〇ドル	一六ドル	小麥 二〇	〇・八〇ドル
同	一・六〇ドル	一六ドル	リンネル二〇	〇・八〇ドル
ドイツ、一〇日の労働	一・一五ドル	一一・五〇ドル	小麥 一〇	一・一五ドル
同	一・一五ドル	一一・五〇ドル	リンネル一五	〇・七六 $\frac{2}{3}$ ドル

これらの價格において貿易額は次の如くなつたと假定する。

合衆國、小麥 輸出	單價	〇・八〇ドル	總量	一〇、二五〇、〇〇〇ハ八、二〇〇、〇〇〇ドル
ドイツ、リンネル輸出	單價	〇・七六 ² / ₃ ドル	總量	九、四〇〇、〇〇〇ハ七、二〇〇、〇〇〇ドル

即ち合衆國よりドイツへの輸出は増進し、ドイツよりの輸入は減少する。輸出超過額百萬ドルはドイツに貢納として支拂ふべき金額に一致するから、爲替手形の需要は供給と合致し、外國爲替はバーに戻つて、均衡狀態に到達するにいたるのである。

しかし注意すべきは、この場合の均衡は「貿易收支」のそれではなく、「國際收支」のそれであることである。しかしてこの狀態は合衆國には二重の意味において不利 less favorable である。即ち、合衆國はドイツに貢納を支拂はんがために巨額の小麥を手離さねばならぬのみならず、この取引を遂行すると同時にその輸入するリンネルの支拂をなさんがために、自國の小麥を不利なる條件で交換せねばならぬからである²⁾。(F. W. Taussig, International trade, New York 1927. pp. 110-12. 宮川貞一郎譯)

『國際商業原理』(昭和五年、一六五—一九頁)

(2) 貿易條件の變化は二つの觀點より考察される。一は總實質貿易條件 gross barter terms of trade の變化であり、他は純實質貿易條件 net barter terms of trade の變化である。前者は輸入と輸出の全量に關するものであり、後者は財の支拂に供せらるゝところの財にのみ關するものにして、その他の「貿易外の」支拂に充てらるゝ財の移動を除外する。貢納の場合に貿易條件はいづれの觀點よりしても合衆國に不利とならざるを得ないのであるが、その程度は「需要の狀態によつて決定される。」本文に舉げた例は合衆國に不利に作用する需要の場合であるが、いま、もし合衆國の小麥に對するドイツの需要が彈力的であれば、それだけ合衆國の貿易條件が悪化する程度は輕減されるであらう。(タウシツク、前掲書、一一三—七頁、邦譯、一七〇—七六頁)

即ち、タウシツクは

(一) 小麥に對するドイツの需要 $\parallel$ 非彈力的 ($\wedge$)、リンネルに對する合衆國の需要 $\parallel$ 彈力的 ($\vee$)
(二) 小麥に對するドイツの需要 $\parallel$ 彈力的 ($\vee$)、リンネルに對する合衆國の需要 $\parallel$ 彈力的 ($\wedge$)
の二つの場合を擧げるのであるが、ウイルソンはこれだけでは不十分であるとして、更に次の二つの場合があることを指摘してゐる。即ち、

(三) 小麥に對するドイツの需要 $\parallel$ 彈力的 ($\vee$)、リンネルに對する合衆國の需要 $\parallel$ 非彈力的 ($\wedge$)
(四) 小麥に對するドイツの需要 $\parallel$ 非彈力的 ($\wedge$)、リンネルに對する合衆國の需要 $\parallel$ 非彈力的 ($\wedge$)

これである。しかして、この最後の場合は極めてあり得ないけれども、第三の場合については、タウシツクの考慮する二つの場合よりもヨリ一層あり得ないとは內在的にいふことができない、と。更に、ウイルソンは、タウシツクの議論の致命的缺陷は兩國における同じ財に對する需要を無視せる點にあると主張してゐる。(R. Wilson, *Capital imports and the terms of trade*. Melbourne 1931. pp. 56-62)

それはともかくとして、こゝに注意を要するは、右のタウシツクの需要狀態への言及が、勿論、傳統的なトランスファ理論に重大なる——いはゆる近代理論的の——一の修正を加ふるものでないことである(イヴェルセン、前掲書、二二八頁参照)。即ち、我々がさきに(前號、六八頁)ミルについて述べたことがこの場合にも妥當するのであつて、こゝで繰返す煩を避けようと思ふ。なほ、後段八、八六頁参照。

以上はタウシツクがその著『國際貿易論』第十一章において貢納に關して述ぶるところであるが、通常の對外貸付に關する所論(同書、第十二章3)も機構の大筋についてはこれと同様である。たゞこゝに注意すべきは、何等の代償も得ない一方的價值移轉たる貢納と、年々利子の支拂を受け、一定期間の後には元本の償還される貸付とは、全然

同一視するを得ないことである。後の場合には、利子の支拂が年々増加するに従つて貿易條件は次第に借入國に不利となり、最後に元本が支拂はれるときは全くその地位が逆轉することとなる。「國際貸付の國際貿易および國際支拂に對する影響は、その取引が初期の段階にあるか、中間の段階にあるか、終局の段階にあるかによつて異なる。」(タウク、前掲書、一二九頁、邦譯一九二頁參照、な⁴⁾ 4) 同書、一三〇—一三三頁、邦譯一九四—一六頁參照) しかしながら、貸付の初期の段階においては(利子が控除額として作用するほか)、貢納の場合と資本移轉の機構は異なるところがないといふ立場から、タウシツは前と同様の推論(即ち、國際貸付→正貨流出→物價の相對的變動→貿易變動→貿易條件の變化)を行つたのである。しかし、それらがミルの所論と全く同一であることは、改めて指摘するまでもなからう。

(3) この部分は、前掲一九一七年の論文中、金本位の下における調整機構に關する敘述を殆どそのまま收録せるものである。この場合注意すべきは、タウシツが恰もそれがリカルドの說であるかの如く考へてゐた點である(ヴァイナナー『カナダの國際貸借』二〇三頁參照)。曰く「正貨はロンドンからニューヨークへ移動するであらう。それに續いてリカルドにおよびミルの讀者には周知の一聯の結果が起るであらう。物價は大ブリテンにおいて下落し、合衆國において騰貴するであらう。云々」(前掲論文、三九四頁)と。(傍點——松井)

(4) この點を初めて明かに述べたのはケアンズ(J. E. Cairnes, *Some leading principles of political economy newly expounded*, London 1874, pp. 431-37)である。その所論はエンヂェル、前掲書、九四—五頁に要約されてゐる。

たゞ、しかし、對外貸付の場合について、タウシツは古典學派傳來の理論に一つの修正を加へてゐる。それは、對外貸付には必ずしも金の移動を伴ふものでないことを認める點である。即ち、借手がその借入手取金の全部もしくは

は一部を貸付國において直接商品購入のために用ふる場合には、爲替相場の變動→金移動→物價水準の變動なくして實質的トランスファーが實現される、といふのである。

「大ブリテンも合衆國もいづれも金本位にあるとすれば、アメリカのロンドンにおける借入は大ブリテンより合衆國へ正貨を移動せしめるに違ひない。『せしめるに違ひない』——とは餘り強過ぎる言ひ表はしかも知れない。正貨の移動は必ずしも起るのではなく、全然起らないことも可能であるだらう。(下略)

「正貨の移動が全然起らないであらうといふ、可能であるがしかしあり得べからざる場合 the possible but improvable case は、アメリカの借手がその使用し得る貨幣もしくはクレデットを一回限り大ブリテンにおいてイギリス商品の購入に用ふる場合である。例へば、彼等が鐵道會社發起人であつて、その借入手取金の全額を大ブリテンにおいてレール、汽關車、鐵橋材料等々の買入に用ふることは考へられる。その場合は送金は、大ブリテンより合衆國へ全然行はれないであらう。イギリス商品は取引の直接的結果として合衆國へ輸送され、外國爲替は全然影響を蒙らないであらう。

「かくの如き場合においては、國際借入の影響は直接的となる。商品移動と貿易收支は直ちに影響される。大ブリテンよりの商品輸出は、外國爲替の攪亂といふ中間的段階なくして、また、正貨の移動および物價の再調整なくして、商品輸入に超過する。(下略)」(前掲論文、三九—一三頁、なほ前掲書、一二三—一六頁、邦譯一八五—一八頁參照)

この特殊の場合において、タウシツクは貸付の許與は貸付國より借入國への購買力の移轉を意味することを知つて

をり、かゝる特殊の假定の下にあつては、購買力のトランスファ―は自働的に貿易收支の必要なる逆轉をもたらすことを認むる如くであるが⁵⁾、しかし借入金金全部または一部が借入國にてその國內出費のために用ひられる場合には、彼は傳統的な分析を固執するのである(タウシツク、前掲論文、三九三―四頁、および前)。(イヴェルセン、前掲書、一二六頁參照)

(5) 従つて、タウシツクは右の如き場合には貿易條件の變化が起らないことを承認してゐる(前掲書、一二七頁、邦譯一九〇頁)。しかしながら、彼は「借入金金全部がこのやうにして費消されることは多くはあり得ないのであり、通常はたゞその一部分のみが費消されるのである」(前掲論文、三九三頁、前掲書、一二六頁、邦譯一八八頁)と考へ、その限りにおいて貿易條件の變化の生起を必至とするのである。

しかしながら、タウシツクのこの分野における主たる貢獻の一つは、「部分價格水準」sectional price level の分析を調整機構の中にとり入れたことである。それ故に、以下節を改めて、部分價格水準の分析について理論的發展を顧みようと思ふ⁶⁾。

(6) 新古典學派のトランスファ―理論的發展を見る場合逸すべからざるは、タウシツクの高弟ヴァイナーである。しかしながら、この學派の現代的最高水準を示すヴァイナーの所論は別稿にて研究する豫定であるから、こゝでは割愛する。

七

いはゆる國內品と國際品(貿易品)との區別の認識は、リカルドー(ヴァイナー『國際貿易理論の研究』三二三頁、三一五頁)ないしケアンズ(ヴァイナー『カナダの國際貸借』二二―頁、イヴェルセン、前掲書、四七三―四頁)にまで溯り得る。

「貨幣の價值は如何なる二國においても決して同一でない」、「大概の國に共通な諸貨物の價格にもまた可なりの差等がある」(リカルド『原理』ゴンナー版、一二四頁、小泉譯、一二八頁) とリカルドがいふとき、前後の關係は彼が金の輸送費、獎勵金および關稅、商品輸送費、および輸送不能なる「國內品」の存在に基くところの、個々の商品に對する金の購買力が國を異にするによつて異なることを念頭に置いてゐたことを示してゐる)。(ヴァイナリー『研究』三一五頁)

(1) ヴァイナリーは更に、マルサス宛の一書翰(一八二三年五月三日附)において、リカルドは金の價值が國によつて異り得る可能性を、商品輸送費および輸送不能なる商品の介在を擧げることによつて説明してゐる、と記してゐるが、『書翰集』Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus 1810—1823, ed. by J. Bonar. Oxford 1887 には右の日附の手紙はなく、またその如き趣旨の章句は何處にも見當らない。ヴァイナリーの何等かの錯誤ではなからうか。

ケアンズは、右のリカルドの大まかな言(ケアンズ、前掲書、四九一頁註)を敷衍し、金はすべての國において同じ價值を有するものでないことを明確に主張して、次の如くいふ。曰く、

「(上略)通商關係ある諸國間には、その價格が國を異にすることによつて著しく異り得ないところの商品——即ち、穀物・穀粉・茶・砂糖・諸金屬および多くの工業原料の如き、重要商品を形成するところのすべてのもの——の大なる群がある。原則として諸價格の差は生産國と消費國との間の運送費より大でないだらう——勿論、常に、これらの商品が各國關稅法の適用を受ける場合を除く。この種の商品の交換において、金の價值は、全世界にわたつて同一でないけれども、一般通商の範圍内では著しく異らない。しかしながら、重要商品を形成する商品以外に、

遠距離輸送に適しないことによりもしくは他の何かの障碍のために國際貿易に入らないものがある。これらの商品に關しては、それらの金價格、もしくは、從つて、それらに對する金の價值が、世界の遠隔の地におけるのみならず、時には同じ國內の諸地方間においてすら、著しく異なることを妨ぐるものは何もない。しかしてこの記述の妥當する商品群は——それは各國の事情および用ひ得る交通機關に應じて異なるであらうが——鎖細なものでないのみならず、場合によつては最も重要な一般的消費財の或るものを含む。このことを理解せんがためには、この群は住居、肉類の諸項目および「食料」として綜括せらるゝものゝ大部分を含むことを想起しきへすればよい。しかしてかくの如き「國內品の」表は、もし我々が主要通商路より離れてをり、交通機關の發達不完全なる諸國を取扱ふ場合には、著しく擴大されるであらう」(ケアンズ、前掲書)と。

しかしながら、この種の部分價格水準の分析の果實を最も完全かつ有効に貿易理論に取入れたのは、タウシックであつた(ヴァイナ「カナダの國際貸借」二二〇—二二一頁、「外國貿易の理論」一一一頁、「タウシック教授の國際貿易理論」論への貢獻」前掲書、一〇頁、『國際貿易理論の研究』三二三頁、イヴェルセン、前掲書、二二六頁、四七四頁)。

タウシックは、すべての商品が國際貿易に入り込むのではなく、一國において生産された商品にしてその國においてのみ賣られ使用されるものゝあることを認識して、國際品と國內品との區別を設ける。即ち、國際品 international goods とは「輸出入貿易の客體たるもので、國際市場を通じてその價格が同一なるもの」をいひ、これに反し、國內品 domestic goods は「全然輸入も輸出もせられず、必ずしも各國において同一の價格を有しないもの」である。例へば價格に比較して重量のある・從つて運送費が禁止的高率である煉瓦の如き、これである。(タウシック、前掲書、三四—三五頁、邦譯五〇—五一頁)

すべての商品が國際品である場合には、物價は二國において（運送費を除き）同一であるが、そのほかに國內品の存在する場合には、國際品價格は二國において同一であるが、國內品價格はそれ自身の法則に従ふ。即ち、國內品生産における勞働效率が同じ商品を生産する他國の勞働效率に比し大であれば、それらの價格はヨリ低廉となる。従つて、一般物價水準は二國において必ずしも同一ではあり得ないこととなる。（タウシツク、前掲書、三四頁以下、邦譯四九

in relation to international trade, O. J. E.)
Vol. 20, Aug. 1906. pp. 487-522 參照

さて、一九一七年の論文（前出）においてタウシツクは、借入手取金の全部もしくは一部が貸付國における商品購入に直接用ひらるゝであらうことを認めたが、しかしかくの如きはむしろ例外であつて、通常、借入金的大部分は借入國に持ち歸られて、そこで國內品を買ひ、勞働者を雇ふことに用ひられる、と主張した（前段六、七九）。しかしして借入金が借入國に送らるゝ限り、爲替相場は變動して金現送點を割るにいたり、貸付國より借入國へ正貨の移動が行はれ、その結果、兩國物價および貨幣所得の相對的變動、従つて貿易變動が起り、送金額に等しき貸付國より借入國への輸出超過が成立するにいたるのである。（タウシツク、前掲論）²⁾。

(2) これに對してヴィクセル (K. Wicksell, *International freight and prices*, O. J. E. Vol. 32, Feb. 1918) は、借入金が直接國內品の購入に用ひられる場合でも、借入國の輸出に用ひ得べき商品量 *the amount of commodities available for export* がこれによつて減少するから、同様に國際收支の調整は行はれる、との異論を提出したといはれ（ヴァイナー『カナダの國際貸借』二〇五頁）、これが通説となつてゐるが（例へば、ホッイト、前掲書、一九頁、イヴェルセン、前掲書、二三〇頁註二、二四五頁）、ヴィクセルの右の論文中、それに該當する章句は見られない。ヴァイナーも後に「現在私はヴィクセルによるこの議論の明確な

敘述を見出すことはできない」と、前者の記述を訂正してある(『國際貿易理論の研究』三〇六頁註二八)。たゞし、いふまでもなく、右の論點を考慮すべき必要は、これによつていさゝかも減少せしめられない。

即ち、タウシツクは、金移動と物價水準の變動なくしては、借手の外國商品に對する、および從來輸出されてゐた自國品に對する購入の増加が借入金額に正確に等しくなるところの、明かな機構がない、といふのである(ヴァイナ―『カナダの國際貸借』)。蓋し、ヴァイナ―の推論するが如く、借入が財の形態にて全部移轉されんがためには、借入金額に等しき輸入超過(借入國より見たる)の成立が必要であるが、もし借入手取金の一部が常に國內品の購入に向けられるならば、この輸入超過は起り得ないであらう。しかしながら、國內品の購入が増加すればその價格は他の諸商品に比して騰貴し、國內品の價格が國際品の價格に比し騰貴すれば、輸出品の價格が輸入品の價格よりも騰貴することゝ相俟つて、借入の財の形態における移轉を實現する程度に輸出を減退せしめ、輸入を増加せしめるであらう。(ヴァイナ―『國際貿易理論の研究』)即ち、タウシツクは、國際收支の調整機構における國內品價格水準の變動の重要性を強調するのである。

部分價格水準の分析はその後、ヴァイナ―によつて更に發展せしめられ、その推論された部分價格水準變動の趨勢はカナダの國際借入について具體的に立證された(『カナダの國際貸借』二〇五頁以下、二二七頁以下、なほ『外國貿易の理論』3)。かくの如くにして、この分析はトランスファー機構の説明にとり入れられ、重要な役割を演ずるにいたつたのであつて、最近の文獻はすべてこれを用ひてゐる。しかし注意すべきは、いはゆる古典的理論においてのみならず、

近代理論においてもまたこの種の分析が重視されてゐることである⁵⁾。いな、逆に、イヴェルセンによれば、部分價格水準の分析は近代理論において初めて當にトランスファー理論の中にとり入れられることが可能なのである。

(3) その詳論は別稿に譲る。

(4) 例へば、エンヂェル、前掲書、第十六章、ウィルソン、前掲書、第四章、Th. O. Yntema, A mathematical reformulation of the general theory of international trade. Chicago 1932. pp. 88-9. ヌルクセ、前掲書、第三章、キンズワールバーガー、前掲書、第四章、等。

(5) オーリン、前掲書、第二十章、イヴェルセン、前掲書、第十二章第二節(四七二頁以下)。

八

以上我々は、いはゆる古典學派のトランスファー理論と稱せらるゝソーントン⁶⁾ミルの理論、およびそれを繼承してヨリ一層整備せるタウシツクの理論、ならびにそれらの理論の主要なる修正もしくは醇化を概観したのであるが、この派の理論の特徴は、イヴェルセンによつてこれと對立せしめらるゝいはゆる近代理論と比較することによつて、ヨリ一層明瞭ならしめられる。そこで我々は續いて、近代理論の發展を顧みるべき順序に立ちいたつたわけであるが、それに先立ちて、近代理論の内容を既知のものとして、それとの對照においていはゆる古典的理論の性格を要約することによつて、一應本稿を結ばうと思ふ。

以上に展開した所論がすべて何等かの程度において金本位を前提としてをり、従つて、金本位の下における國際收支調整機構論であることは、こゝに改めて指摘するまでもなからう。

さて、以上の理論の特徴は、まづ第一に、出發點において需要の不變を前提とする點に見出される。即ち、資本移動が行はれても兩國の需要狀態は、その價格狀態が變動しない間は、不變に保たれるとする。従つて、その限りにおいて、資本移動に對應する全面的貿易變動は生じ得ないこととなり、貿易變動が實現されない以上は、金が移動しなければならぬ。この金移動によつて初めて兩國の價格構造は變化し、價格變動の發生を俟つて初めて兩國の需要は變動し、これによつて必要な貿易變動が成立する。金移動によつて兩國の價格水準は、金流入國即ち資本の借入國において騰貴し、金流出國即ち貸付國において下落する。従つて、貸付國の輸出超過、借入國の輸入超過が實現し、移轉資本額に等しき價額の追加的商品移動が成立するにいたる。しかし、右の如き兩國價格水準の相對的變動によつて、貿易條件は借入國に有利に、貸付國に不利に變化しなければならぬ。

即ち、古典的理論において問題となるのは、需要變動 *changes in demand* 即ち需要の價格弾力性 *price elasticity of demand* である。従つて、價格の變動せざる限り需要の變動は起り得ない。しかして價格の變動する以上、貿易條件は借入國に有利化せねばならぬ、と主張されるわけである。これに反し、近代理論においては、需要狀態は、價格の變動なくとも、資本移轉に伴ふ購買力の移轉(即ち、所得の増減)によつて變動すると主張する。即ちこの説は、需要推移 *shift of demand* 換言すれば、需要の所得弾力性 *income elasticity of demand* 或は需要の屈伸性 *flexibility of demand* を問題としてゐるのである。従つて、貿易條件は資本移動によつて借入國に有利化するものとは限らぬ、その逆の場合もまたあり得ることが論斷されるのである。

(1) 國際貿易理論の分野における「需要の屈伸性」概念への論及は、ホワイト、前掲書、一八頁およびイヴェルセン、前掲書、五〇八頁に若干見出されるが、これを詳論せるはキンドワールバーガーである。彼の論文 *Flexibility of demand in international trade theory*, Q. J. E. Vol. 51, Feb. 1937, pp. 352-61 (松井譯『バーガー國際短期資本移動論』三七五頁以下に譯載) および前掲書、第二篇を見よ。なほこの點については、松井邦譯書、譯者序三頁參照。

(2) 需要狀態に關する右の所論をヨリ一層明確ならしめんがためには、兩理論の根本的相違をミルとバステープルについて需要曲線のグラフを用ひて比較對照せる、イヴェルセンの説明(前掲書、二〇六—八頁)を藉るを便宜とするが、こゝではこれを省略する。なほ J. C. Gilbert, *The present position of the theory of international trade*, *Review of Economic Studies*, vol. 3, no. 1, Oct. 1935, pp. 23-4 參照。

我々が兩理論をその内容的特徴に従つて、「價格變動說」Ⅱ「需要推移說」の對立として理解せんとする所以である。いま、この點を少しく別の觀點から解明するならば、それはまた「供給說」Ⅱ「需要說」の對立として把握される。

即ち、「Ⅰは供給の側を重視し、貸付國は如何にして輸出を増加し得るかの問題に答へることによつて資本移動の過程を把えんとするものであり、他は需要の側に重點を置き、購買力移轉に伴ふ需要の變化は兩國生産分野に如何なる變換をもたらすかの問題を中心としてこの過程を究明せんとするものである」(鬼頭、前掲書、四六頁)。換言すれば、前者は供給の側を専ら問題とするために、需要の側は變化しないことを前提としてをる。別言すれば、資本を移動せしめる要因と商品貿易を發生せしめる要因との間に直接何等の關係もないことを暗黙の中に想定するものである。これに反して後者は、需要の側から問題を取扱い、國際收支の均衡は購買力の移轉によつて自働的に成立すべきことを強調する。換言すれば、國際間の貸借と商品貿易との間に直接的關聯の存することを認めるものである。繰返していへば、前者

は、需要の變化は購買力の移轉の行はれた後に至つて初めて生ずるものであり、その移轉のためには第一に供給側が變化せねばならぬといふ立場をとるに反して、後者は、供給の側とは無關係に最初に先づかゝる購買力の移轉の行はるべきことを主張するのである。(同書、四四—一七一頁)

以上、いはゆる古典學派のトランスファ―理論の特徴を近代理論のそれと比較することによつて、我々は對立する二つの理論の性格、ならびにその力點の相違を明確に把握することができたと考へる。しかしながら、かくすることにおいて、我々は少しく前進し過ぎたおそれがある。蓋し、いま一つの理論の内容の展開およびその發展の跡を顧みるに先立つて、その理論的特徴を簡単に掲げたからである。それ故に、我々はひるがへつて、この後の理論(需要推移説)の研究に従はねばならぬ。本節における記述の大部分は、その後において再び讀み返さるべき必要が生ずるであらう。(完)

——昭和十五年十二月二十日初稿

昭和十六年四月二十一日再稿——